

「前ではなく、後ろへ」

(マルコによる福音書8:31-38)

大齋節第二主日、ひたひたと十字架が近づいてきています。今日の福音、主イエスはご受難についてお話しされます。主イエスは同時に「3日の後に復活することになっている。」と、復活の希望も語っています。けれどもペトロは復活ではなく、十字架上でのご受難にばかり気を取られています。復活など到底信じられない、想像も及ばないということもあると思いますが、ご受難という出来事、その苦しみや闇の引力というのは、復活という希望に目を向けられなくなるほどに強いのだと思います。大齋節はまさにその主イエスの苦しみや、主イエスを十字架につける人の闇に留まるときです。この社会が、自分自身がその闇を抱えていることをあらためて自覚するからこそ、ご復活の希望を知ることができるし、イースターを心から喜ぶことができるのだと思います。ペトロと自らを重ね、今日の福音に聴きましょう。

この社会に、わたしたち自身に闇がある、と言いました。その闇というのは、罪と言い換えてもいいと思います。神から離れてしまうのが罪です。神が光なら、その逆は闇です。なぜわたしたちは神から離れて闇に向かうのでしょうか。それこそ、今日の福音に明らかにされていることです。今日の福音は、ペトロと主イエスが叱り合った場面です。受難と復活について弟子たちに告げた主イエスを、ペトロは脇へとお連れして「いさめ始めた」とあります。場面を想像するだけでも、何だかその不遜な態度に自分を見るようで嫌な気持ちになります。この「いさめる」という単語は、主イエスがこのあとペトロを「叱った」という単語と同じです。ですから、ペトロは主イエスを叱りつけたのです。イエス様を脇へ連れ出し、「おいおい、そんなこと言われては困りますよ」ってやっているのです。ペトロがなぜこのようなことをしたかという、自分の師匠であり、救い主である主イエスが十字架なんかで死なれては堪らないからです。自分が信じた救い主は、この地上の力強い勝利者として君臨してくれなければならなかったのです。不遜なのはペトロだけではありません。弟子の中には、主イエスが王座に就いたなら自分を両脇に、他の弟子たちよりも偉くして欲しい、などと頼み込む兄弟もいたことを忘れてはなりません。この弟子たち姿こそ、神から離れる人間の姿の象徴です。韓国民主化闘争時代、ローマ・カトリックの詩人、金芝河による『金冠のイエス』という戯曲があります。少し内容を紹介します。

舞台はある小さな村。登場人物は、「重い皮膚病を負った人」「野宿者」「売春婦」の3人、つまり明らかな被差別者が主要な登場人物です。3人はある寒い夜、腹をすかせ自分たちの運命を嘆きながら肩を寄せ合って座っています。彼らのすぐ横には、「黄金の冠」を被せられたイエス像が建てられています。それはかつて、ある大会社の社長によって建てられた像でした。その社長はこのイエス像に言いました。

「イエスよ、金の冠はまったくあんたにお似合いた。その冠は実にこの世の王にふさわしい。いや王の王だ。その冠であんたはまったく魅力的だ。けれどイエスよ、あんたのその金の冠が、去年のクリスマスに、忠実な僕、わたしの寄付で作られたことを忘れないでほしいね。イエスよ、わたしにしこたま金を儲けさせてくれ。そうしてくれりゃあ、次のクリスマスにはわたしはあなたの体全体を金箔で飾ってやろう」さて、このイエス像は、肩を寄せ合って寒さを凌いでいる貧しい三人の前で突然叫びます。

「どうか自分を囚われの身から自由にしてくれ。解き放ってくれ。本当に貧しく、困難に生きている人を解放するためには、わたしがまず解放されなければならない！」

こう懇願して叫んだのでした。

とても考えさせられる内容です。教会は歴史の中で、自分たちの思いを叶えるために立派な聖堂を作り、主イエスに金の冠を被せ、誠に救いを必要としている人々から神を遠ざけてきました。これは韓国の戯曲ですが、ドイツのある神学者は「神の私有財産化」という言葉で同様のことを指摘しています。わたしたちはどうでしょう。この戯曲の社長ほどに、あからさまに主イエスに命令することはないかもしれませんが。けれども主イエスよりも前に出ようとする、神をも自分のものにしようとする、ということはない

でしょうか。大齋節、そのような自分と神との関係を省みたいと思います。

さて、このペトロに対して、今度は主イエスが叱る番です。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

強烈な言葉です。けれども、これはとてもとても深い愛の言葉なのです。「引き下がれ」というのは「わたしの後ろだ」という意味の、力強い言葉です。自分の思いや願いを優先させる。誰かより偉くなりたい。自分を肯定するため、自分の思いを叶えるため、神をもコントロールしようとする。自分の理解できる範囲に神を収めようとする。そういう思いが勝って、主イエスの前にだって出てしまう。これこそ、神から離れようとするわたしたち人間の罪に他なりません。しかしそこに留まっていたら、復活を通して示される、実現するまことの救いに与ることはできません。そうなれば人はさらに神から離れ、相変わらず復活の希望に心が向かないまま、闇から闇へと進んでしまいます。だからこそ、主イエスは「わたしの後ろだ」と命じるのです。主イエスの後ろにいればこそ、十字架と復活を通して実現する希望へ、死の闇ではなく復活の希望へと導かれるからです。

さらに、今日の福音で主イエスはこう言っています。「わたしの後に従いたいものは、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」主イエスの後ろを歩くということは、わたしたちも自分の十字架を背負って歩むということです。十字架を背負うなど、わたしたちには到底できないことのように思います。けれども主イエスはそれを望んでおられます。では、自分の十字架を背負うとはどのようなことでしょうか。ここで言う十字架とは、自分の思いや人間の常識とはかけ離れた、「神の思い」のことです。なぜなら、主イエスは神の思いを担って歩まれた先で、十字架にかけられたからです。ですから、十字架を背負うとは、神の思いを背負うということ、神の思いに身を委ねるということです。ならば、神の思いとは何でしょうか。それは、大事な御子の命を差し出すほどにわたしたちを愛しているということです。神はわたしたちすべての命をこの上なく愛しておられる。この愛と祝福こそ、神の思いです。ですから、十字架を背負って生きる、神の思いに生きる、とは、神に祝福された者として、神に愛された者として生きる、ということです。神さまの愛を全身に受け、わたしたち一人ひとりが互いに神に愛されたものとして、互いに愛し合うこと。その愛を神にお返しして生きること。これが、自分の十字架を背負って生きる、ということであり、主イエスが求めておられることです。

けれども、この世で愛されている人間として生きるとはとても難しいことです。自分を愛することができない、神の愛を素直に受け取ることができないからこそ、その隙間を埋めようと人は主イエスの前に出てまでも、自分の思いを主張してしまいます。そうでないと不安で、怖いからです。その不安や恐れをごまかすために、神をもコントロールしようとするのです。そうして、金の冠を主イエスの頭に被せた社長のように、主イエスの前にすら出ようとするのが人間です。主イエスはそんな人間の弱さをよくよくご存知だからこそ、「わたしの後ろだ」と言って、身を挺してわたしたちを守ってくださるのです。「神のことを思わず、人間のことを思う」のが人間です。しかし、「わたしの後ろだ」と叱った主イエスは、そんな人間、人間の罪もろともご自分の背中に背負い、歩んでくださる方です。十字架の上で、ご自分の命もろとも、その罪を滅ぼしてくださる方です。その主イエスの後ろを歩く。こんなに安心な、嬉しいことはありません。神の思いを全身に受け、十字架を担う主イエスが前を歩んでくださるからこそ、わたしたちは主イエスの受難にとどまるのではなく、その主イエスを復活させた神の愛までも知ることができる、神の愛をいただくことができるのです。「主イエスの後ろ」にいてこそ、まことの希望、神の愛をいただく命へと迎えられるのです。

大齋節。自分を、自分たちを神の愛から遠ざける力があるのならそれと向き合ひましょう。そして、十字架に込められた神の愛に満たされ、神に祝福された者として歩みを新たにしましょう。主イエスが身を挺して守ってくださいます。そればかりか、主イエスを復活させられた神が、わたしたちの命をも必ず救ってくださいます。主イエスの前ではなく、主イエスが招く主イエスの後ろへ。わたしたちの視線の先にいつでも主イエスの背中がありますように。